

東洋興業会長の 松倉久幸さんの 浅草六区芸能伝

【第64幕】

去る令和5年2月25日、〈伝説の浅草芸人〉深見千三郎の生誕100周年を記念し、江戸川大学メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科の西条昇教授の下で学ぶゼミ生の主催で、深見ゆかりの地を巡るウォークツアーが開催されました。深見夫妻の姪・松木せつ子さんを特別ゲストに迎え、大衆芸能史研究者である西条教授の解説を聴きながら、浅草十六区周辺の各所を巡るとい、贅沢なイベントです。

何よりも嬉しく、また興味深かったのは、令和の学生さんたちが、ふた昔も前の（笑）昭和の浅草芸人…しかもテレビ界に進出せず、世間的には極めて地味な存在だった深見千三郎にスポットを当ててくれたことでした。

そこで今回は、ツアーに参加した本誌記者が、後日あらためて江戸川大学にお邪魔し、西条教授とゼミ生の皆さんに、イベントの趣旨や深見ら浅草芸人に対する思い、さらには、現在勉強している大衆芸芸史についてのお話などをさまざまな角度から伺ってまいりました。

【今回お話を伺った方々】

- 西条昇教授：江戸川大学メディアコミュニケーション学部 マス・コミュニケーション学科教授。大衆芸能史研究者、お笑い評論家、構成作家。メディアへの出演、新聞等への執筆、著書多数。
- 西条ゼミ 新4年生の皆さん
(左)石澤純^{みづ}さん、(中)ゼミ長・内山^{りく}莉子さん、(右)津田^{きり}らりさん



浅草通にはたまらない西条教授の貴重な談話と、学生さんたちの新鮮なご意見を通じ、いつもとは一味違った目線からの浅草芸能を、どうぞお楽しみ下さい。

記者：まずは、今回のイベントを企画した経緯について、お聞かせ下さい。

内山：私達も3年生になり、卒論や就活の準備に費やす時間が増える中、何かもつとゼミらしいことをしたいね、という話になって…。

津田：皆でイベントをしようと思った時、西条先生の大衆芸芸史という授業の中で、今年は深見千三郎さんの生誕100周年に当たる年だと教わりました。ちょうどピークたけしさんの修業時代を描いた映画「浅草キッド」が公開され、たけしさんの師匠である深見さんが注目された時期でもあったので、ならば大衆芸芸史の授業の延長として、深見さんをテーマに浅草ウォークツアーをすれば、面白いんじゃないかということになったんです。

記者：企画力、抜群ですね！参加者は、どんな方たちが多かったのでしょうか？

西条：50〜60代の男性が多く、はるばる広島からいらした方というもいました。予約開始からわずか2時間足らずで30名の定員が埋まってしまったのは、驚きでした。内山：SNSでイベントを知ったという方も意外に多く、幅広い層からの応募がありました。

記者：当日は、浅草東洋館(旧フランス座)を皮切りに、オペラ館跡、喫茶店ブロンディ、木馬館、捕鯨船、浅草駒太夫さんの店、松竹演芸場跡、ロック座、らーめんコン

ト…と廻り、最後は深見さんが亡くなった第二松倉荘の跡地で解散でした。実際に深見さんが過ごした場所を自分たちの足で踏みしめて、どんな風を感じましたか？

津田：特別ゲストの松木せつ子さんが、第二松倉荘の建物の構造や部屋の間取りなどを驚くほど鮮明に記憶していて、一つ一つ具体的に説明して下さいました。ああ、本当にここで深見さん達と交流して、生活していたんだなとリアルに実感でき、ジーンときてしまいました。

西条：松木さんとは、1年ほど前に某雑誌の取材で知り合いました。その時も、伯父伯母にあたる深見夫妻のことや、同時期に第二松倉荘で暮らしていた若き日のたけしさんのことなど、何でも包み隠さず話して下さいました。ならば今回のツアーに同行して現場で話して頂ければ、参加者にも情景が伝わるんじゃないかと思い、お願いした次第です。松木さんが5歳の頃から、深見さんの楽屋にお弁当を届けていたというエピソードなど、貴重なお話も聞きました。石澤：深見さんもたけしさんも、今まではどこか遠い世界の人だと思っていました。今回のイベントを通じて、はじめて身近に感じることが出来ました。

少し前のテレビ番組で、たけしさんが身体を張って笑いをとる姿に衝撃を受けたのですが、それも、やっと腑に落ちた気がします。深見千三郎という偉大な師匠の下で学んだ方だからこそ、たけしさんはこんなに偉くなったも、ずっと人を笑わせることにこだわり続けていくんだな、と。

記者：参加者の反応は、いかがだったでしょうか？

内山：当日は予想外の寒さに見舞われ、急遽カイロを買いに走ったり、週末の雑踏を大人数で移動することに緊張もしましたが、イベント終了後のアンケートでは、「楽しかった」「また参加したい」という好意的なご意見が圧倒的だったので、とても嬉しかったです。中には「次回はさらにマニアックなテーマがいい」という方もいて（笑）、色々な方が浅草について知りたいと思ってくることが分かり、あらためて遣り甲斐を感じましたし、将来自分がやりたいことを再認識する良い機会にもなりました。

記者：今回のイベントは、大衆演芸史という授業の延長上に企画したことですが、現在就活中の皆さんは、それぞれに、西条先生の下で学ばれたことを将来どんな仕事に繋げて行きたいと考えていますか？

津田：私は、芸能マネージャーの仕事に就きたいです。演芸やエンタメの歴史を網羅している西条先生の授業を通じて、どんな芸能に対する興味が深まってゆきました。

内山：私は、イベントの企画・計画に関わる仕事がしたいです。演習実習で、一から何かを生み出すことの楽しさや、自分の得意分野に気づけたことが、何より大きいです。

石澤：私は、舞台照明の仕事をやりたいです。ここでは技術的な授業はないので、その部分は自力で勉強しています。

テランにも活躍の場を上手く作れたというのは、すごく大きいと思うのですが、もう一つの大きな流れ、古くはエノケン・ロッパの喜劇に始まり、深見さんからたけしさんへ繋がっていった浅草コントの系譜が、次世代に上手く受け継がれていない現状が、とても残念です。浅草コントの伝統を体現できるような、才能ゆえにアクも強いタイプの芸人も評価され、活躍できる場が整えば、いいなと思います。

記者：浅草再生のヒントになる貴重なご意見に、感謝です。今回の取材は、浅草誌の今後を考える好機にもなりました。

西条先生、皆さん、本当にありがとうございました。



今は近代的なマンションになってしまったが、周囲には昭和情緒の残る第二松倉荘跡で。

（取材・口述筆記 高橋真以子）

記者：今回お話を伺っていて、皆さんが学ぶことを心から楽しみ、自ら行動し、将来のビジョンをしっかりと描いていることが、何より素晴らしいと感じました。勉強って、本来こうあるべきものだな、と。そういう学びの場を作っていらっしゃる西条先生自身の仕事に対する姿勢が、そのまますたさんに伝わった結果だと思えます。深見さんの背中を見て学んだたけしさんが、世界中の人を驚かせる人物になったように、皆さんも西条セミで学んだことを活かして、いつが大勢の人を笑顔にしてくれることを願っています。

西条：彼女達が入学した年は、ちょうどコロナの真っ只中。2年生の後期から徐々に対面授業が復活してくる中で、僕の講義が入学後に初めて大学の教室で受ける授業だったという子もいましたから、つらい時期を経て、学びたい気持ちに火が付いたというのもあると思います。それぞれ希望の分野での就職が叶い、活躍してもらえれば何よりです。

記者：それでは最後になりますが、浅草芸能研究の第一人者である西条先生に、率直なご意見をお聞かせ頂ければと思います。深見千三郎、北野武に続く優れた芸人を輩出するために、今の浅草に必要な要素はなんでしょうか？

西条：近年でいうと、ナイツというスターが誕生したことで、漫才協会は世代交代に成功し、活性化しました。ナイツが東京漫才の伝統を彼らなりに受け継いで、若手にもべ